

鷹陵史学会第26回年次研究大会

公開シンポジウム

「継承される史料―人々の行為とその思想―」の趣旨

歴史学研究において、過去の痕跡を残す様々な史料はなくてはならないものである。なぜなら、史料を通じてのみ、私たちは過去を見ることができからである。

その研究において基本的な手法となるのは、現存する様々な史料のうち、特に文字史料、例えば書物や日記など（以下史料）を対象に、史料批判を行いつつ、記述内容から記述された当時の出来事を知ろうとすることである。その際、私たちの意識は史料が作られた当時の事象に向けられている。

しかし、私たちが研究に利用する史料とは、その成立から現在に至るまで、時代ごとの当時の人々によって伝えられるなか、単に書写を行うのみならず、内容に対して様々な改変作業が行われつつ写本や異本が作成され、継承し伝えられてきたものである。さらにいえば継承とは、記述内容の改変だけでなく、史料の外側の部分、つまり装訂などの形態の改変も含めて行われてきたといえる。このような、時代ごとの人々による史料への改変行為には、その史料を利用した人々が生きた時代の精神や考えが反映されている。この意味で、歴史学研究で用いられる史料には、人々の選択行為を経て残されてきた経緯があり、史料そのものが持つ情報を改変しつつ継承し伝え残されてきたものという、人間の行為そのものが投影されているのである。そして史料を残すという行為は時代・地域・史料の種類を問わず普遍的にみられよう。

以上をふまえ、本シンポジウムでは、私たちが研究に利用する史料がどのような経緯で伝え残されてきたものなの

か、また、過去の人々がなぜ史料の記述や装訂を改変し、写本や異本を生み出してきたのかを考えたい。それはつまり、誰が何を考え、いかなる目的をもつて、何を誰に対して残し伝えようとしたのかについて考えることである。

そのために、さまざまな史料の記述と装訂、いわば史料の内側と外側と、その当時の人々による史料に対する行為に注目し、異なる時代・地域・史料を対象として、その行為の経緯を比較する。藤本氏は、日本中世の貴族の日記や記録類を、頼氏は、フランス中世以降の貴族社会における狩猟書を、斎藤氏は、日本中世において読まれた『日本書紀』を、それぞれ考察の対象として、各史料の利用形態や受容のあり方を明らかにしている。諸氏の報告とその内容の比較を通して、写本・異本を作り、伝え残す人々の思想の特色や固有性だけでなく、さらにその先にある「史料を残す」という行為の基底を明かにしたい。そしてそれは、今日の私たちがいかに史料を継承・保存し、破棄していくかという問題を考えることにもつながるのではないだろうか。